

「底が突き抜けた」時代の歩き方 265

「闇を掘る」言葉の力と無縁な 小泉総理の絶叫

森前首相には「沈黙する力がない」と喝破したのは、作家で精神科医のなだいなだである。「えひめ丸」の事故が起きたとき、ゴルフ場にいた前首相が「わたしはここ（ゴルフ場）を離れない方がいい」と言い訳したことについて、なだ氏は『アエラ』（01・2・26）で、「自分が指揮しても、役には立たない」という告白に等しく、「自分は無能だ」という本音が出たとみて、こういう。

《彼には、沈黙する力がないのだ。黙るべき時に、黙れない。それは、語るべき時に語れないことと表裏一体の関係だ。

なぜ、そうなるのか。

本当の権力がないからだ。正当な信任がないからだ。彼はわずか数人の密室談合で選ばれてしまった。彼には、自信もなければ、能力もない。その不安までが、言葉に表れてしまう。

おかげで、孤独だ。周囲にブレーンもいない。だから、彼のもう一つの大切な本音は、隠れたままにされる。》

なだ氏は、《ただ思いつきで、目の前にある言葉を発してしま》う前首相と比較して、《作家カレル・チャペックは、チェコのマサリク大統領が示した沈黙を、深い思想を背景にした重みあるものとして描いた。ところが日本の政治家には、深い言葉はない。それ以上に深い沈黙も、ないのです》と締め括る。いうまでもなく沈黙と発語は対立するものではない。沈黙の深さと発語の深さはちょうど見合っており、言葉は空虚にむかって発されるものではなく、沈黙にむかってこそ発されるものなのである。「沈黙する力」のなかった森前首相に対して、では小泉首相は「沈黙する力」を備えているだろうか。ただいえるのは、小泉首相の発語はあまりにも歯切れがよく、威勢がよすぎることであり、口の中でもごもご言っているだけでなにを言っているのかよくわからなかった従来の首相にないタイプで、前首相が森氏であっただけに、小泉首相のモノをはっきり言う発語のありかたが、誰の耳にも新鮮に響いたことは間違いない。

だが、その小泉首相の言葉の歯切れのよさがある傾向を帯びていることに、多くの人が気づき始めている。朝日新聞（01・11・29）の論壇時評（経済学者間宮陽介）では、いくつかの指摘がなされている。「痛みに耐えてよく頑張った。感動した」というあの文句を例に、《小泉首相には言葉、なにかんづく接続詞が欠けている》と指摘する

のは、経済学者の田中直毅である。それは、首相の言葉が知に語りかけるものではなく、斎藤美奈子もいうように、情に訴えるものであるからだ。つまり、考えさせる言葉ではなく、感情でつながろうとする言葉なのだ。だから、《テロ事件と報復戦争に触れ、出来事の筋道を解きほぐすべき言葉が不在である》という、評論家の加藤周一による当然の指摘もなされる。憲法前文と9条をめぐる、「神学論争は止めよう」という首相の発言が、堂々巡りの不毛な論争だけでなく、新たな論理を構築していくための論争自体の忌避をも含んでしまうことを考えるなら、首相のいう「感動の政治」がますます考えない政治であることがわかってくる。

時評者の間宮氏はそれらの指摘を受けて、《言葉が崩落する徴候は以前からあった。例えば小泉首相の靖国神社参拝。戦争と平和は論理的には背反的であるが、氏において両者は必ず背反的ではない。ちょうど、好きと嫌いという対立語が心情においては両立するように（「嫌い、嫌いも好きのうち」）、氏においては、戦争と平和が心情によって結びつく。

9月11日の出来事は言葉の崩落現象を決定的にしたように見える。世界貿易センターの倒壊は何よりも、ものごとを論理的に構築する言葉の倒壊を象徴している。報復戦争を正当化するために、「豚は馬である、少女は少年である、戦争は平和である」という類の新語法が大手を振ってまかり通る。

言葉の崩壊による最大の犠牲者は法であろう。同時多発テロをきっかけにして、国際法や日本国憲法がずたずたに切り裂かれ始めている。そして切り裂かれた言葉がこんどは合理性を欠く論法でつぎはぎされる》と説く。

このような言葉の崩落現象はもちろん、政治状況だけではなく、《言葉を生命とするジャーナリズム》をも深く貫いている。というより、政治における言葉の空洞化とジャーナリズムにおける言葉の空洞化は、お互いに手を取り合って同時進行を押し進めているのだ。たとえば、《映像にしろ活字にしろ、ジャーナリズムは事実を追従し、映像・活字が銃後の守りとなっている。北部同盟がカブールを制圧し、タリバーンが虫の息となると、ジャーナリズムは映像と活字でタリバーンの追い打ちを開始する。解放感でわき上がるカブール市民、反対に市内のあちこちに残る拷問と虐殺の跡》、あるいは、アメリカの大学町に滞在中野敏男のレポート（現代思想10月臨時増刊）によると、《テロによる悲劇が語られ、事件3日後には早々と「国民の祈りと追憶の日」の儀式がとり行われながら、被害者の実像がいつこうに見えてこ》ず、《被害者が匿名化され、「無垢な市民」、「英雄的な消防士」という形象だけが流通して、悲劇に雄々しく立ち向かうアメリカという、国家像が作り上げられる。》

ここに深く欠落しているのは、「何故」という問いであり、事象が隆起するプロセスへの飽くなき視点である。《言葉が事実の後追いをし、事実に合わない言葉は意味を改

変される。あるいは言葉が事実^{じじつ}に先回りをして、事実を逆に作り上げる。これに加えて、善と悪、自由と規制、改革勢力と抵抗勢力というふう^{ふう}に、言葉が二元論的に単純化されているのも、昨今の際だった傾向である。公共事業には確かに無駄が多いし、そのうえ住民の生活環境に悪影響を与えているものもある。だったらまず問題にすべきは公共事業を「いかに」行うか（例えば住民主導）であって、民営化に直行するのは短絡であり、飛躍である。

同じことは教育についてもいえよう。戸瀬信之氏と西村和雄氏が論じているように（『大学生の学力を診断する』岩波書店）、ゆとり教育はこれまでの教育を詰め込み教育と規定することによって、教育のもつ訓練としての一面をもいっしょに洗い流してしまった。その結果が大学生の学力低下である。「何故」という疑問が好奇心を育て、事項と事項、現象と現象を結びつける接続詞が思考力を形成するのに、言葉のデフレ現象が進行しているのは教育も同じである》と、間宮氏は締め括る。

小泉首相の政治スタイルについては、朝日新聞コラムニストの早野透が同紙（01・12・11）で、興味深い考察を行っている。小泉改革は「ファッショだ」という声が自民党内や医師会などの各関係諸団体から湧き上がっていることを取り上げて、『小泉さんはファッショなのかどうか。ファシズムといえばドイツのヒトラーだけど、それと比べるのはさすがに大げさだ。そこでチャプリンが映画「独裁者」でヒトラーを模したヒンケルと小泉さんを比べると、これがよく似ているので驚く。

ヒンケルの演説は絶叫である。小泉さんの演説も絶叫でやんやの喝采^{かつさい}を浴びる。ヒンケルはユダヤ人を敵に仕立てる。小泉さんは「私に反対するのは抵抗勢力」と明言している。ヒンケルはヒンケル・ボタン、小泉さんは小泉グッズを売り出す。

ヒンケルは「国家のために生活を犠牲にせよ」と言い募る。小泉さんは「構造改革のためには痛みを耐えよ」と繰り返し、大企業のリストラも青木建設の破綻も「構造改革の進展」と述べてはばからない。それでいて支持率はなかなか落ちない。

ファッショといわれて小泉氏はどう思うのか。

「自分の意向に反することをやられると、だいたい政治家はファッショといって（相手^{あて}を）非難するんだよ。指導力なのか、ファッショなのか難しいところだな」

いきりたって反応しないところが余裕なのか。

自民党内からは「来年度の国債発行30兆円以下」の小泉氏の公約に縛られるべきでないという声^{こゑ}が澎湃とあがる。しかし、小泉氏は「私が首相になったということは、大きな政策転換なんだよ」「党の言うことは聞かないで行く」と動く気配はない。（中略）

まあ、いまのところファッショというよりは政策転換のきしみと言ったほうがいいだろう。ただし、ある与党幹部はこう言っている。

「小泉さんに対して物申すことができるのは、永田町にはだれもいない。だって、小

泉さんはだれの世話にもならないで総理大臣になったと思っているんだもの」

例えば、「5人組」によって密室で選ばれた総理大臣だったら党内に気兼ねすることもあったろうが、党员投票で選ばれた小泉氏にはそんないきさつはない。

自己肯定して照れず、「なんでこんなに支持率が下がらないんだかわかんないんだよなあ」と小泉さんが楽しそうに漏らしていると聞くと、これはファシズムよりナルシシズム（自己陶醉）というべきかもしれない。過去の自民党政治にへきえきした国民もまた、「小泉酔い」というべきか、多少の異論はあっても小泉さんと進みたいと思っているのかもしれない。》

問題は、首相自身がはまっている「小泉酔い」に国民もはまっているという構図にあるにちがいない。たぶん首相自身の「小泉酔い」と同様に、国民もまた、「小泉酔い」の自分自身に酔いたいのかもしれない。これまでどの首相も酔わせてくれることはなかったのだから。いうまでもなく「酔い」はどんなものでも、思考力を奪う。酒酔いであれ、恋酔いであれ、そこに思考力はない。逆に、思考を忘れるために、人は酔いたくなるのである。それ故、酒酔いでの論争に実りあるものはなに一つない。首相自身の「小泉酔い」には当然、首相の思考は働いていない。それは、思考を必要としない言葉が駆使されていることを意味する筈だ。「宰相小泉の空虚なる語法」（『文藝春秋』01・8）を撃つのは、作家の高村薫である。

まず、5月9日の衆議院本会議における民主党枝野幸男の、「総理はどうして郵政三事業の民営化が必要だとお考えなのでしょうか。（中略）郵政三事業による民業圧迫について、総理はどうお考えになっているのか、お聞かせ下さい（後略）」という代表質問に対する小泉首相の次の答弁を取り上げる。

「①民間にできることは民間に任せる。この基本姿勢は、私の内閣は貫いていきたい。
（中略）民営化はタブーで触れられなかった、わたしの内閣になったからタブーじゃなくなったのです。国営化しかないという前提はとりません。（中略）かつてのように、
②商品券は民間企業が配達してよい、しかし地域振興券は民間企業が配達しちゃいかぬという③旧郵政省のわけのわからない論理は、④小泉内閣には通用しないということを銘記していただきたい。（中略）⑤過去の郵政省の事業を見ていると、むしろ、民間企業の活動を妨害している面がある。⑥こういうことは、小泉内閣では断じて許さない」（註一番号、傍線共に高村氏）

《先ず①の部分は、まさに小泉流というべき文節の短さ、簡素さであり、こういう単純さが聞く者の耳をとらえて離さない。

②は、いたるところで小泉氏があげる聞き慣れた事例である。いつでもどこでも同じ言葉、同じ表現、同じ内容を語るのが、小泉式語法の大きな特徴でもある。実は、①のタブー云々も頻繁にくりかえされる言い回しの一つである。

③の「わけのわからない論理」は、官庁について政治家が評するには少々大雑把、かつ情緒的な、むしろ野党的な攻撃の言い回しである。小泉流答弁が「軽快さ」「明快さを」を感じさせる一つの要因がここにある。

④と⑥は、これはまさに小泉流断定の語法の見本である。

⑤は、質問者の質問の微妙なすり替えに当たる。「民間企業の活動を妨害している」という答弁は、「民業圧迫をどうお考えになるか」という質問のオウム返しであって、正しく質問に答えていない。聞く者は前後の威勢のよさに耳を奪われてつい聞き落としてしまうが、小泉流答弁ではこの種のすり替えが多発する。》

結局のところ、郵政民営化が必要な理由に対しては「民間にできることは民間に任せろ」、民業圧迫についても「断じて許さない」の一言で、《質問者は往々にしてまともな回答を得られないことに絶句し、一方国民は「断じて許さない」の一言に喝采を送る。わたくしたちの国会の論戦はいま、こんなふうになっている》と高村氏はいう。小泉流語法にみられるのは、《「簡潔」「断定」「すり替え」「繰り返す」の四つ》の基本的特徴であり、《文節の短い、簡潔な言葉は論旨を単純化》し、《単純は「断定」を生みがちであり、簡潔にはいかなる複雑で微妙な事柄については「繰り返す」や「すり替え」が起り、最後はあいまいなままに置かれる。》

この小泉式語法は当然、どのような論戦にも貫かれる。靖国神社公式参拝では、「公式とか非公式とかよくマスコミに取り上げられますが、いまだに私はわからない」、その理由は「総理大臣に就任してからも、24時間SPが、警護というか監視というか、どちらかわかりませんが、常に私のそばにいてくれます。(中略)そういうことを考えれば、私の24時間の行動に私生活はないといえばそうかもしれません。そうする中で、公用車で行ったとかSPがついているから公式だとか公的だと言われても、これはどう答えていいかわからない」、そして、《自分は戦没者を思う気持ちから総理大臣として靖国神社へ参拝するのだと繰り返す》て、「これは日本人としてこの気持ちは、宗教とかそういう関係はありません。自然な人間の気持ちではないか。それを、よそから批判されてなぜ中止しなきゃならないのか」というのはいまだに理解に苦しむわけであり(後略)」。

この一連の答弁に対して高村氏は、《ここでも、分かる分からないの単純な語法が、最後は「よそから批判されてなぜ中止しなきゃならないのか」という短絡を招いているが、それ以上にわたくしを驚かせるのは、公式か非公式かについての論点が、SPや公用車といった的外れな話に堂々とすり替えられていることである》と批判する。首相の公式参拝が中曽根内閣以来たえず問題になるのは、国及びその機関はいかなる宗教活動もしてはならないと定める憲法20条に、国の機関としての内閣の首長である首相の参拝が抵触するからであり、この問題をめぐって政府与党の間でも様々な意見や解釈が論

議されてきているのに、「いまだに私は分からない」で済ませようとする首相に、民主党の菅直人は憲法20条とA級戦犯合祀の問題から、次のように追及する。

首相「戦没者にお参りすることが宗教的活動だと言われればそれまででありますけれども、靖国神社に参拝することが憲法違反であるとは思っておりません」

菅「言われればとかと、私が言っているんじゃないんですよ。(中略) A級戦犯の合祀についてはどう考えられているのか、きちんとお答えください」

首相「宗教的活動であるからいいとか悪いとかいうことではありません。また、A級戦犯が祭られているからいけないということにもとりません。私は、戦没者に対して心からの敬意と感謝をささげるために靖国神社に参拝するつもりであります」

以上のやりとりを通じて支離滅裂な首相の答弁から伝わってくるのは、靖国参拝は憲法違反ではない、だから靖国参拝を行うということである。高村氏が指摘するように、《このような意味不明の答弁は枚挙にいとまがない》として、ここでもう一つ、自由党の小沢一郎党首が第二回党首討論の場で、《この国が旧来の政治経済や社会の仕組みでは立ち行かなくなった現在、政治が行おうとしている種々の改革について「それをやることによってどういう行財政の仕組みをつくるのか、あるいはどういう日本の社会の構造をつくろうとしているのか、そういうやっぱり全体像を」示してくれ》と迫ったときの首相の答弁をみておきたい。

高村氏によれば、《結論から言えば小泉首相は小沢氏の求めた「全体像」について一つも語らなかった。具体的にその答弁の内容を要約すると、最初に自由党の提唱している地方分権の進め方について触れ、自民党と趣旨に大差はないという言及である。次いで道路財源や地方交付税など、たんにこれまでの財源を財務省に移すのでなく、『骨太の方針』によって今まで出来なかった見直しをしていくという所存の表明》の後、「小沢さんの党が日本一新ということを前から掲げられておりました。私は今、新世紀維新という言葉掲げて言っておりますが、日本一新も新世紀維新もどう違うんだと言われればちょっと困っちゃいますけれども、目指す方向は、このままではいかぬ、やはり日本を新しく生まれ変わらせなければいかぬなという気持ちについては共通する面が随分あるのではないかと考えております」と締め括られる。

もう高村氏も言葉を多く費やしない。《この答弁を聞く限り、小泉首相は小沢氏の質問をまるで聞いていなかったか、あるいは、元来この国の全体像を思い描くような想像力とは無縁の人であるかの、どちらかである》というだけだ。そんな人が田中真紀子外相に「人の話はよく聞きなさい」と宣^{のたま}うのだから、笑ってしまう。そして、《小泉首相の語法は、その単純すぎる論理と断定によって、種々の議論を拒絶しがちな語法であることが分かる。人を指さし、演台を叩いての派手な絶叫も、語法が単純であるからこそ可能なのであり、絶叫はやはり議論を拒絶する》と見抜く。小泉純一郎という政治家が

どの程度の政治家なのかは、だいたいその輪郭がはっきりしてくる。オレにはまだなにかがあるぞ、と思わされてきて中を覗き込んだら、なんにもなかったということだ。この政治家もまた、「言語明晰、意味不明瞭」の政治家の嫡子^{ちやくし}であることは間違いなさそうである。

しかしながら、これまでの「言語明晰、意味不明瞭」の政治家は、国民によって馬鹿にされてきた。もちろん、言語不明晰、意味不明瞭の政治家も敬遠されてきた。だが小泉首相は、政治の世界なんて芸能の世界と一緒になんだよ、といわんばかりに、その是非を抜きにして政治ドラマをワイドショー化して、国民のお茶の間にまで持ち込んでくれた戦後初の首相である。そのある意味での無茶は高村氏もいうように、《本来非常に複雑なものでしかあり得ない政治の語法を、茶の間に合わせて単純な語法に変えてしま》うという無茶を前提としていた。つまり、複雑な政治が複雑なまま分かりやすくなったのではなく、複雑な政治を分かりやすくするために非常に単純化されてしまっただけのことなのだ。

問題は、小泉首相が政治の単純な語法を駆使していることにあるのではなく、多くの国民がそれを願望しているところにあるだろう。議論を拒絶する小泉首相の語法が国民に人気があるということは、国民もまた議論を拒絶する各々の単純な語法を生きようとしているということである。もちろん、語法の単純化は思考の単純化であり、思考が単純になれば行動も単純になる。アメリカ同時中核テロを契機とする小泉内閣の対応があまりにも条件反射的な単純さであったのは、思考が単純であったからだ。思考が単純になり、行動が単純になれば、どこへ行きつくことになるかは、歴史を紐解けば明瞭である。

小泉政権は国民の「期待」だけで成り立っている。月日も重ねて小泉首相の中身がかなりさらけだされてきているのに、なお政権は国民の「期待」のみに支えられている。経済は下降し、生活はますます苦しくなりつつあるのに、国民の「期待」は衰えない。国民の苦境が政権に対する「期待」を逆に引き上げていくようにすらみえる。しかし、我々はどこか勘違いしている。「期待」の政治ほど危険なものはないということ。自分たちに期待できるものは何一つないから、絶叫政治に「期待」を向けるという図式はあまりにも単純すぎる。「期待」というものは我々の外にあるものではなく、我々の内にあるものではないのか。あらゆるものに対する冷徹なまなざしを持たなくなったら、そんな我々に寄り添う「期待」はどこにも生まれてこないだろう。小泉首相の語法は「闇を掘る」言葉とは無縁な空虚なものであるが故に、彼が振り撒いている「期待」も空虚なものである。「期待」は自分の「闇を掘る」作業の中にしかないのは、生きることの重みを少しでも考えてみるなら、当然なことではないのか。

2001年12月23日記